

「水辺」の技術誌

——水鳥獲得をめぐるマイナー・サブシステムの

民俗知識と社会統合に関する一試論——

菅 豊

- | | |
|----------------------|---------------------------|
| 1. 問題の所在 | 4. 水鳥獲得の社会的技術と生態的技術 |
| 2. 村落社会における水鳥猟の社会的意義 | 5. 水鳥獲得の実態と経済的意義 |
| 3. 水鳥猟の背景にある知識と技術 | 6. 結語—“副業”からマイナー・サブシステムへ— |

論文要旨

水鳥を捕る狩猟は、その棲息地が身近な平地農村部であったために、かえって狩猟研究の分野では卑近なものとして見過ごされ、とりたてて文化史のなかに位置付けられることもなかった。また、広く生業研究の分野をながめてみても、それは“副業”的経済の意味しか与えられておらず、その背景にある潤沢な自然に関する民俗知識というものは看過されてきた。民俗学において、「人間がどのように生きてきたか」という側面から人間に焦点を合わせた時、生業の活動の一部を簡単に、そして安易に“副業”という言葉をもって表現することは危険である。“副業”とは、経済的に重要度の高い“業”に対し相対的に低いものに与えられる卑称となる場合が往々にしてある。その言葉によって陥る先は“瑣末な”“取るに足りない”生業という評価であり、その結果もたらされるものは、看過そのものである。鳥猟研究はまさに“副業”という言葉によって発展性の見えない領域におとめられ、見過ごされた課題であった。

本稿では、まず、水辺の鳥たちを利用するための、今まさに消え去ろうとしている全体的技術、知識の束を可能な限り抽出することを目標とする。

この束を単純に分ければ、3つの民俗知識の小束に分類することができる。第1に、この民俗知識には、生物そのものの行動や習性に関する生態的な知識がある。第2に、それらを取り巻くような形で、獲物としての水鳥を獲得する人間側のアプローチの知識、技術がある。第3に、より外延的ではあるが第2のテクノロジーと無縁ではないものとして、水鳥をめぐる人間側の社会関係、経済関係に関わる知識、技術がある。これは狩猟法、猟場に関する共同体規制とか、生産物としての水鳥の利用（処理、売買など）に関する知識、技術などである。このような知識、技術の束は、現実にはまだ他にもさまざまな位相で、水鳥を取り巻いていたのに違いない。“副業”であるからといって、人々の感性や知の統合力が力を弛めるわけではないのである。本稿では、従来の狩猟伝承研究では取り扱われにくかった、“副業”としての平地性鳥獣猟をマイナー・サブシステムと読み替え、それにも豊富な民俗知識、技術が存在することを指摘し、その実像により接近する。そして“副業”的であると軽視されがちな活動の社会的意義、経済的意義の実体の積極的な評価を目指している。